東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

1.インターフェロンは肝癌を防げるか(第13回医療短大研究会)

著者	小林　光樹
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	8
号	2
ページ	225-225
発行年	1999-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/33713

東北大医短部紀要　8(2)：225～226，1999

〔報告〕

第12回医療短大研究会

平成10年10月15日（木）18：00-19：00
医療短大大講義室

講師：小笠原鉄郎先生（東北労災病院消化器科）
演題：「一般病棟におけるがんのターミナルケア」
内容は総説として掲載。

第13回医療短大研究会

平成11年1月21日（木）18：00-19：00
医療短大大講義室

講師：小林光樹先生（東北大学医療技術短期大学部看護学科）
演題1：「インターフェロンは肝癌を防げるか」

肝細胞癌は慢性肝疾患を母体に発生するが，その内訳のうち73％はC型慢性肝疾患である（東北大学第三内科）。そこで，平成1年から5年の間に東北大学第三内科で行った肝生検症例のうちC型慢性肝疾患234例を対象とし，インターフェロン治療群と未治療群に分けて肝細胞癌の発生を比較した。この234例の中からは，肝生検のF0（犬山分類，以下同じ）であった7例中0例（0％），F1であった125例中2例（2.5％），F2であった15例中0例（0％），F3であった60例中5例（8.3％），F4であった30例中7例（23.3％）に平成10年5月までの観察期間中に肝細胞癌が発生し，慢性肝炎から肝硬変に進行するにつれて発生率が増加していた。対象のうち，インターフェロン治療群は161例（平均観察期間64.3ヶ月；平成10年5月現在，以下同じ），未治療群は76例（83.6ヶ月）であった。この中で観察期間中に肝細胞癌が発見されたのは，インターフェロン治療群161例中5例で発生年率（1年間の間に100例のうち肝細胞癌が発生する割合）は，0.58であったが，これに対し，未治療群では76例中9例で発生年率は1.70であった。したがって，発生年率はインターフェロン治療群では未治療群に対し2.9倍低いと考えられた。

次に，肝細胞癌は肝疾患の進行とともに発生率が増大していた事から，肝炎の持続との関連について比較を行った。まずインターフェロン治療群において，厚生省難治性肝疾患研究班の基準に基づいて治療6ヶ月後の血清GPT値が正常（著効），正常上限の2倍以内（有効），それ以上（無効）に分けると，肝細胞癌発生年率が著効と有効症例では0.00であったが，無効症例では0.99であった。また，観察期間中の平均GPT値が正常の2倍以内と2倍以上に分けてみると，インターフェロン治療群では2倍以内の症例では発生年率0.29に対し，2倍以上の症例では1.80であった。未治療群では，2倍以内の症例で発生年率が1.20に対し，2倍以上の症例では4.02と，インターフェロン治療の有無に関わらず肝炎の活動性の低い症例に肝細胞癌の発生が低い傾向にあった。

まとめ。(1) C型慢性肝炎症例のうち未治療群は，インターフェロン治療群に比較して肝細胞癌の発生リスクが2.9倍高かった，(2) インターフェロン治療群・未治療群ともに，肝炎の活動性が低い症例（平均GPT値が正常上限の2倍以内）では，肝細胞癌発生のリスクが低かった。

講師：増田高行先生（東北大学医療技術短期大学部衛生技術学科）
演題2：「クローナリティ解析」

病理学は，病気の原因とメカニズムを明らかにすることを目的とし，人体解剖から発達し，人体病理学として集大成されている。その形態学的知識を臨床に応用し，手術摘出材料や生検材料が癌かどうかの診断を行っている。癌の病理組織学的判断は，従来は形態学的基盤により行われてきたために，細胞の顔つき，周囲への排他的態度により行われている。しかし，形態学的判断基準のみでは，鑑別の困難な例も時折みとめられる。

現在，癌は細胞回転が増加し限りなく増殖をし